

神の解答を見た怪盗

千葉日本大学第一中学校 1年 長嶋 風果

歴史の教科書に載るほどの大事件や大災害はある日突然起こるものだ。それがいつ起こるかなどというのは誰も知る由もない。古来からそのようなことを人は「神のみぞ知る」という。だがもしも、この世のどこかにその全てが載っている本があるとすればどうだろうか。

どこにでもある地方都市のどこにでもある博物館。そこにその本はあった。

その本には未来が、具体的にはこの先数百年に起きる戦争や大災害、社会を揺るがす事件や事故などが網羅されているらしい。らしいというのは、現在では観覧客はもちろんのこと、博物館のスタッフでさえ、それを見ることを許されていないからだ。この本は以前からここにあったが、数年前に起こった大災害と、ここ数年で生じた戦争を言い当てたことで話題となり、その本を一目見ようとする人が博物館に押し寄せるようになった。話題の本は国をも巻き込み、その内容から閲覧できるものは厳しく制限された。故にこの本は今嚴重な管理のもとにある。日中はその本のためだけの観覧室に分厚い強化ガラスに入れられた状態で安置され、事前に観覧予約をし、嚴重なボディチェックを受けた観覧客だけが、数メートル離れた場所からガラス越しにその本を拝むことを許される。夜間は博物館の金庫に移され保管されている。その嚴重さゆえ、かのアルセーヌ・ルパンや怪人二十面相でさえ、この本は盗めまいと言われているくらいだ。

そんな本の噂を、怪盗は彼が働く職場で聞いた。仕事といっても盗みではない。元々、怪盗はこの国で知らぬものはいない腕スキの盗人だった。怪盗が絵に描いたような見事な盗みを行う度に、メディアは盛んにそれを報じ世間は喝采を浴びせた。人々は口々に彼のことを「神怪盗」と呼び、怪盗の斬新な盗み方や脱出法が話題にならない日はなかった。しかし、それも数年前までの話だ。ここ数年、怪盗は世間を沸かせるような盗みをしていなかった。彼が盗みたくなくなるような魅力的なものがもはやこの国になかったのだ。怪盗は盗みをやめ真面目に働いていた。そんな中聞いたこの本の噂に怪盗は心を躍らせた。その本の「誰にも盗めない」というステータスに、他のどんな宝石にも代え難いほどの魅力を感じたのだ。これを盗んで、また喝采を浴びたい。誰もができないという困難を打ち破って栄光を勝ち取りたいという欲求が、怪盗にこの本を盗む計画を立てさせた。

ルパンや二十面相の如く、颯爽と現れて手際よく対象を盗みさるには、かなりの事前準備がいる。まずは盗みの基本中の基本である「現場の状況理解」をするべく、怪盗は博物館に観覧客として通い詰めた。本のセキュリティは嚴重だった。観覧客として入っても本を触るところか近づくことさえできない。客の立場からこの本を盗むのは不可

能だと怪盗は判断した。

そこで、怪盗は博物館職員として潜入することにした。外から盗めないならば、内側から盗めば良いと考えたのだ。だがこれも一筋縄ではいかなかった。本の管理は館長か副館長が行なっており、一般の館員には近づくことさえ許されていなかったのだ。金庫と展示室の移動もその二人のどちらかが行なっているということだった。怪盗は思案した結果、長期戦で臨むことに決めた。館員としてそこで勤勉に業務を行い、信頼を勝ち得て機会の到来を待つのだ。

それから、怪盗は博物館で約3年真面目に働いた。怪盗はその手先の器用さと社交的な性格から上司や同僚に気に入られ、あつという間に出世していった。また日々の仕事の中で得意の観察を怠らず、ある日副館長の横領を暴き、それを告発することで副館長を辞職に追い込んだ。その功績によって、怪盗はとうとう本の管理を許されている副館長に任命された。

本に近づく権限を手に入れた怪盗は犯行予告をした。

「○月×日、未来が書かれた本を頂戴する 神怪盗」

世間は久々の怪盗の登場に沸いた。メディアも連日博物館に訪れ、怪盗にどのように対処するのかと副館長である怪盗に質問を浴びせた。怪盗への対処について答える彼が実行犯であることなど皆知る由もなかった。

そして犯行予告の日。閉館後の静まり返った博物館の金庫前で、怪盗は副館長として例の本を金庫にしようとした。いつも通りに行ういつもの作業。そのいつもの作業の途中、怪盗はあらかじめ用意し懷に忍ばせていた本を取り出した。それは本物の本と見た目がそっくりな本だった。これと本物を取り替えて金庫に入れ、本物を持ち出せば三年もの年月をかけて挑んだ大仕事が完成する。この日のために全てを捧げてきた。その時間も努力も今日この瞬間報われる。

達成感に包まれたその時、怪盗の全身が閃光に包まれた。眩いサーチライトが怪盗に当てられている。当てている光源へ目を凝らすと、そこには館長や今日まで同僚だった館員たち、そして大勢の警察がいた。館長が大きな声で言った。

「その本は偽物とすり替えておいたよ。君が今日ここで本を盗もうとすることはわかっていただ。なぜなら、君がその本を盗んだとその本に書いてあったからな。だからこうして罠を張っていたのだ」

警察が怪盗を捕まえようとにじり寄ってくる。

その時、怪盗はニヤリと不敵な笑みを浮かべ、自分が懷に忍ばせて持ってきた本だけを手に、すぐ横にある窓の外に身を投げ出した。窓ガラスが割れ、怪盗の体は博物館の外に放り出される。外に出た怪盗はそのまま暗闇の中へ走り去った。

怪盗は走りながら自分が成功したことを確信していた。なぜなら館長が言ったのだ。「君がその本を盗んだと書いてあった」と。

怪盗は自分のねぐらに着くと、館長室からさっき本物とすり替えるために盗み出した

本を眺めた。その本は偽物というにはあまりに古すぎる本だった。